

1. カリキュラムを学ぶ意義と「カリキュラム」の語源

教育や人材育成の中核にある問いは、**「何を教えるか」**という点に集約されます。学習者が何を、どのような順序で、いかなる活動を通して学ぶべきかを体系化したものがカリキュラムです。

「カリキュラム」という言葉は、16世紀のオランダ・ライデン大学などで使われ始めました。語源はラテン語の**「クレレ(currere: 走る)」**であり、もともとは「(馬車が)走るコース」を意味していました。それまで大学教授が個々に自由勝手に教えていた内容を、学生のために「何から始めてどこで終わるか」という「履修の過程」として明示したことが、近代的なカリキュラム概念の誕生となりました。

2. 西洋教育の歴史的変遷: 古代から 20 世紀へ

西洋におけるカリキュラムの原型は、古代ギリシャの**「自由学芸(リベラル・アーツ)」**に遡ります。

古代から中世: 自由 7 科の成立

自由市民に必要な素養として、以下の「自由 7 科」が定義されました。

- **三学(文系的な論理学の基礎):** 論理学、弁証法、修辞学(レトリック)。
- **四科(理系・理論的な基礎):** 幾何学、算術、天文学、音楽。※当時の「音楽」は楽器演奏ではなく、数学的な理論(調和の学問)としての性質が強いものでした。

中世に入ると、教育の最終目的は「神学」へと至ることに置かれ、自由 7 科はその準備教育として位置づけられました。

18 世紀～19 世紀: 人間観の転換と国家の要請

18 世紀、デカルトやニュートンによる自然科学の発展が「神中心」から「人間・理性中心」の教育への転換をもたらします。

- **ゴータ公国(ドイツ)の義務教育:** 国家や君主のために教育を組織化する「義務教育」の原型が登場します。
- **ルソーの消極教育:** ジャン=ジャック・ルソーは、人間を「生来罪深いもの」と見るキリスト教的観点を否定し、「人間は本来善なる存在である」と説きました。大人が無理に教え込むことを批判し、子供自身の自然な成長を重視する「消極教育」を提唱しました。

20 世紀: 児童中心主義と経験学習

20 世紀は「児童の世紀(エレン・ケイ)」と呼ばれ、ジョン・デューイらによる**「経験主義」**が台頭します。知識を一方向的に注入する従来の「系統主義」に対し、子供の活動や生活経験そのものをカリキュラムの中心に据える「経験学習」が重視されるようになりました。

3. 日本におけるカリキュラム開発の歴史

日本の教育も、時代ごとに「国家の要請」と「子供の視点」の間で揺れ動いてきました。

江戸時代: 実学と寺子屋

- **上層階級:** 藩校や郷学において、儒学(朱子学など)を中心とした中高の徳目を学ぶ「大学」レベルの教育が行われました。
- **庶民:** 18 世紀半ば以降、寺子屋が急増。読み・書き・算盤(そろばん)という「実学」が普及し、当時の日本の識字率は世界最高水準に達しました。

明治～戦前: 近代公教育の成立と国家主義

- **学生(明治 5 年):** 西洋の翻訳に基づいた学問中心のカリキュラムを導入。
- **学校例と教育勅語(明治 19 年・23 年):** 森有礼文相による国家主義的な教育体制が整い、「忠君愛国」を柱とする**「修身」**が教育の筆頭に置かれました。
- **戦時下(国民学校例):** 昭和 16 年、軍国主義色が極まり、教科は「国民科」「理数科」「体錬科」「芸能科」に統合。自由な思考を許さない「インドクトリネーション(思想注入・洗脳)」へと変質しました。

戦後の教育改革: 単線型体系と学習指導要領

1947年、教育基本法のもとで「6・3・3・4制」の単線型体系がスタートしました。ここで重要になるのが、国の基準である**「学習指導要領」**です。

学習指導要領の変遷(揺らぎの歴史)

1. **試案の時代(昭和22年・26年)**: デューイの経験主義の影響を受け、生活経験を重視。法的な拘束力はなく、教員向けのガイドブックという位置づけでした。
2. **系統主義への回帰(昭和33年～)**: 全国学力調査の結果、学力低下が懸念されたことから、知識の系統性を重視する教育へ転換。この時、指導要領が「告示」となり、法的な拘束力(国家基準)を持つようになりました。
3. **現代化とゆとり**: 1960年代には「教育内容の現代化」が進みますが、内容の高度化により「落ちこぼれ」が社会問題化。その反省から、1970年代末以降「ゆとりと充実」を掲げ、授業時数を削減する方向へ舵を切ります。
4. **学力低下論争と「生きる力」**: 「ゆとり教育」が「学力のゆるみ」とであると批判され、2000年代には再び基礎・基本の徹底と時数増へと揺り戻します。現在は「活用・探究」を重視するバランス型を目指しています。

4. 現代のカリキュラム: 教科外活動と新領域の導入

日本のカリキュラムの特徴は、教科だけでなく「教科外活動」を教育課程の重要な一部としている点です。

- **特別活動**: 学級活動、児童会・生徒会、クラブ活動、学校行事。これらは子供の自主的・実践的な活動を促す場です。
- **道徳の教科化**: かつての「道徳の時間」は、2015年より「特別な教科 道徳」となり、数値評価は行わないものの教科としての位置づけが明確化されました。
- **総合的な学習の時間**: 1998年に導入。教科の枠を超えた横断的・総合的な課題解決を目指す、経験主義の現代的な形態です。
- **外国語(英語)教育**: 小学校5・6年での教科化(2020年～)、および3・4年での外国語活動の導入。

5. 2030 年に向けた展望と次期カリキュラムの重点

現在、2030 年の実施に向けた次期学習指導要領の議論が進んでいます。そのキーワードは以下の通りです。

個別最適な学びと共同的な学び

子供一人ひとりの習熟度や興味に合わせた「個別最適化」と、他者と共に学ぶ「共同的な学び」の融合。

ウェルビーイングとエージェンシー

OECD の「Education 2030」プロジェクトに呼応し、子供の幸福(ウェルビーイング)と、自ら社会を変える当事者意識(エージェンシー)の育成が強調されています。

社会に開かれた教育課程

学校内だけで完結せず、社会や地域と連携し、変化の激しい高度情報化社会(AI・ICT の活用)に対応できるカリキュラムマネジメントが求められています。

6. まとめ:カリキュラム開発における 3 つの重要視点

最後に、これからの人材育成・カリキュラム開発において欠かせない視点を 3 点にまとめます。

1. 「目の前の子供」の尊重: 教育は直接的には「社会のため」ではなく「目の前のその子」のためにあるべきです。子供が自立するまでは、国家や社会の都合を押し付けるのではなく、一人の人間としての成長に誠実に向き合う姿勢(自立と共生)が不可欠です。
2. 地球規模課題への正面からの取り組み: SDGs に代表される地球環境問題、核問題、平和の維持。これらは人間の生存そのものに関わる問題であり、カリキュラムの重要項目として扱う必要があります。

3. **高度情報化社会における倫理と自己制御**: これまでは能力を「引き出す・伸ばす」ことばかりが強調されてきましたが、今後は AI やテクノロジーを使いこなす一方で、自らの行動を客観的に捉え、抑制・調整できる「自己制御(フィードバック)の倫理」を確立することが求められます。

教育とは、単なる知識の伝達ではなく、学習者が自立し、より良い社会を共に築くための「走るべきコース(カリキュラム)」を適切に描き続けるプロセスに他なりません。